

化学教育 徒然草

憧れの先生で あり続けましょう

NAKAMURA Satoshi

中村 聡

東京工業大学 名誉教授／沼津工業高等専門学校 名誉教授
2019・2020年度 日本化学会 副会長／2017・2018年度 化学と教育 編集委員長



巻頭言

「憧れるのをやめましょう」は、2023 World Baseball Classicの米国との決勝戦前に、侍ジャパンの選手を鼓舞するために大谷翔平選手が呼びかけた言葉で、流行語大賞2023にもノミネートされました。ここでは、「化学と教育」誌の主要な読者であり、我が国の化学分野のさらなる発展にたいへん重要な役割を担う中学校・高等学校の理科・化学教員に対し、表題の言葉をお贈りしたいと思います。

筆者は大学を定年退職した後、縁あって高等専門学校の校長職に就きました。高専の校長を経験して初めて、とかく高校生世代（高専の本科1～3年生）は自分の身近にいる教員に憧れを抱きがちで、その憧れの存在に少しでも近づこうとがんばって勉強することを知りました。言い換えると、そのくらいの年齢の生徒たちにとって教員は憧れの存在であり、自らが目指すロールモデルなのです。「あなたの尊敬する人は誰ですか?」、「あなたが影響を受けた人は誰ですか?」という質問に対して、大学時代の教員の名前を挙げる人は少なく、中高の教員の名前を挙げる人が多いように感じます。かくいう筆者も、中学生・高校生時代に剣道部の顧問としてお世話になった漢文の先生に尊敬の念を抱いていました。思春期という多感な時期の生徒たちにとって、中高の教員は勉強だけでなく人格形成にも大きな影響を与える存在なのです。

「化学と教育」誌の昨年11・12月号のヘッドラインでは、「探求の過程を取り入れた実験授業の実践例」という特集が組まれました。この「探求の過程」こそ、筆者が長年にわたり教育理念として掲げてきた「自ら調べ自ら考える」の実践そのものであると、ひとり悦に入っています。探求の過程を意識した授業展開がそう生やさしくないことは理解しますが、中高の教員は最も多感な時期の生徒に接するチャンスが与えられた幸運な職業であることは紛れもない事実です。もう一度、強調させていただきます。思春期の生徒たちは、自らのロールモデルにふさわしい憧れの教員を模索しているのです。ぜひ憧れの先生になりましょう。そして、憧れの先生であり続けましょう。もし困ったら、「化学と教育」誌を開いてください。そこには、憧れの先生であり続けるためのヒントがたくさん紹介されています。がんばれ、中高の先生!

[連絡先]

226-8501 神奈川県横浜市緑区長津田町 4259-J2-13 (勤務先)